

---

# 名探偵とチルドレン

白波

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

名探偵とチルドレン

### 【Z-コード】

Z9966V

### 【作者名】

白波

### 【あらすじ】

一度サークルインパクトを経験し歴史を変えるために翻弄していく、シンジはカヲルとの決戦を控える中、レイと共にNERVから逃げ出したしまう。しかし、その途中謎の光に包まれ目が覚めたら、名探偵コナンの世界に来ていた。女の子になってしまったうえ、レイと一緒に幼児化してしまったシンジの話。エヴァの登場人物が容疑者として登場したりします。2オリキャラも登場します。

## プロローグ

サークルインパクトの後、時をさかのぼりすべてが始まったあの日からやり直していたシンジは参弓機のトウジを無事に救出したり、レイの自爆を阻止したりと歴史を変え、確実に良い方向へ向かっているはずだった。しかし、もう一度、カヲルと戦えわなければならない時期が近づいている中それに耐えられなくなつたシンジは歴史を変える上で良き協力者であつたレイと共に、二人でNERV本部から逃げ出した。

第3新東京市 郊外

「綾波…まだ歩ける?」

とシンジが聞くとレイは

「大丈夫…。」

と答えた。

もう一人でNERV本部を出てからどれだけの時間がたつただろ  
うか…一人はエヴァのパイロットであるが表向きにはただの中学生  
である。車などはつかえない、エヴァのパイロットとして得た  
報酬は、まだ、一人が中学生のためシンジの分はミサト、レイの分  
はゲンドウが管理していたため自由に引き出しができず、金銭  
的にも豊かじゃないのであまり遠くへいけないことはわかつていた。  
(とにかくできるだけ遠くへ行かないといふことはわかつていた。  
ERVに連れ戻されないような遠くへ…。)

シンジもレイもNERVから逃げ切れないことはわかつていた。しかし、とにかくNERVから離れたかったのだ。

「碇君…あれ…。」

と言ひながらレイが向こうの方を指差した。その指の先には恐らく自分たちを探しに来たのである「NERV諜報員」が見えた。シンジが

「逃げなきや！」

と言いながら走り出そうとしたとき突然一人はかなりまぶしい光に包まれそのあと何かに飛ばされるような感覚がした。

その後その場所にNERV諜報員が来たがそこに一人の姿はなかつた。

それと時を同じくして日本全国で多数の人が失踪する不可解な事件が起きていた。

## プロローグ（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

これからよろしくお願いします。

## 第壱話 田覚めたら…

「うーは…。」

とつぶやきながらシンジは起き上がった。体に何か違和感を感じながらあたりを見渡すと見覚えのない風景が見えた。そして、後ろを見たとき倒れているレイが視界に入った。

「綾波！」

と言いながら駆け寄るとレイは

「碇君？」

と言った。

「そうだよ、綾波、無事？」

「…。」

「綾波？」

とシンジが呼びかけるがレイは返事をしない。彼女にしては珍しく何かに驚いているようにも見える。

「どうしたの…綾波？」

と聞くとレイはシンジを指差し

「碇君…体…。」

と言った。

「体？」

と言いながらシンジが自分の体を見るとなんだか先ほどの違和感の答えがわかつってきたような気がした。

(まさか！)

と思いながらズボンの中に手を突っ込むとそこにあるはずの物がなかつた。シンジが恐る恐るレイに

「綾波の体は大丈夫なの？」

と聞くとレイは

「問題ないわ…。」

と答えた。

「つまり…僕は女の子にならなかったけど綾波はそのままついで」と

?

とシンジが聞くとレイは

「そのようね…。」

と答えた。

「まずは状況を整理しないと…まあいいはだしなんだひつ…。」

とシンジが言うとレイは

「わからないうちに出れば何かわかるかも…それと碇君…これ…。

」  
と言つながらカバンから白色のワンピースを出した。

「着替え用について思つて前に碇君にもらつたの持つてきたんだけど、碇君、その格好のままじゃ不自然だから…。」

と言つながらワンピースを差し出した。

「あつがとつ…。」

と言つとシンジは草むらの陰で着替えレイと共に近くにあった道に沿つて歩き出した。

しばらぐ歩くと町に出た。とつあえずシンジは公園のトイレに入り鏡を見た。その鏡に写つたのは黒髪の少年ではなく黒い髪を長く伸ばした少女であった。

(これからどうすればいいんだよ…。)

と思つながらトイレから出るとあたりが暗くなり始めていた。

「綾波…とつあえずどこか行こうつか?」  
と言つながら歩き出した。

少し歩いてくるとレイが

「碇君…新しい名前考えないと…。」

と言つた。

「どうして?」

「だって女の子になつたのに碇シンジって名前じゃ不自然じゃない

…。」

とレイに言われシンジは立ち止まり少し上を向いてから  
「やうだな…碇…碇コイって言つのばどひへ。」  
と言った。

「碇コイ?」

とレイが聞き返すとシンジは

「そう…碇コイ…母さんの名前なんだ…。」

と言った。

「そう…いじんじやない?」

とレイが言つと一人は再び歩き出した。

それから一人は他愛もない話をしながら夜の街を歩いて行つた。  
すると偶然迷い込んだ路地で黒い服を着た男たちが何かをしている  
のが見えた。

「これだな…。」

と黒服の男が言つと取引の相手らしき男性が

「もうこれでいいだろ…頼むから勘弁してくれ…。」

と弱弱しい声で言つた。コイとレイがその様子を見ていると後から

いきなり何かで殴られた。

「おい! ガキどもこんなところで何をしている!」

と金髪の男が言つと取引をしていた男が

「ここに見られたんですかい?」

と言つた。

「ああ…。」

と金髪の男が言つともつ一人の男は懐から拳銃を取り出し

「やつちまいやすか?」

と言つと。金髪の男は

「待て…あの女の薬を使う…。」

と言いながら薬のカプセルを取り出した。

「えつ! 兄貴、その薬は…。」

ともう一人の男が言う頃にはその薬をユイとレイの口に入れていた。  
(なんだか、体が熱い...)  
と思いながらユイは気を失つた。

## 第壱話 田覚めたり…（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

これからもよろしくお願いします。

## 第3話 見知らぬ天井

ユイが目を開けると見覚えのない天井が目に入った。

「ここは…。」

と言いながら体を起こすと

「おっ！ 目が覚めたか！」

と言いながら一人の老人が言った。

「綾波は？」

とユイが言うとその老人は

「綾波？ 君と一緒に倒れていた女の子か？ その子だつたらそつちにいるぞ…。」

と言いながら隣のベットを指差した。ユイがそつちを向くとそこには小学生ぐらいの空色の髪をした少女が眠っていた。ユイが「綾波は僕と同じ中学生ですよ…あんなに小さいわけ…。」

と言つと

「APT-X4869…。」

とふいに後ろから声がした。

「えっ！」

と言いながらユイが後ろを振り向くとそこには白衣を着た赤みのかかつた茶髪の少女がいた。

「なんだよ…そのアパートなんとかつて…。」

とユイが聞くとその少女は

「APT-X4869…細胞破壊プログラムの誘発的な作用により神経系を除く骨格、内臓、筋肉、体毛のすべてを幼児化させる神秘的な毒薬つてところかしら…。」

と言つた。

「幼児化つてまさか僕に体も…！」

と言つとその少女は

「あなたもよ…。」

とさらりと答えた。その時レイが  
「うん…。」

と言いながら起き上った。ユイ가  
「綾波、大丈夫?」

と聞くとレイはまたも驚いた様子で

「碇君!…?」

と言った。茶髪の少女が同じよつた説明をするとレイは  
「そう…。」

と短く答えた。ユイは二人の会話を聞きながら  
(この一人声が一緒にからどつちが話しているか分かりづらいな…。  
)

と思っていた。しばらくして老人に

「そういえば君たちはどこの誰なんじや?」

と聞かれた。ユイが

「はい…第3新東京市の…」

と言いかけると茶髪の少女が

「第3新東京市?聞いたことない町ね…。」

と言った。

「えっ!ほら…要塞都市の…。」

「そんなとこどこのにあるのよ?」

「芦ノ湖畔に…。」

とユイが答えるとその少女はあきれたような顔で  
「バカね…そんな街あるわけないでしょ…。」  
と言った。

「とにかくもう少し話を聞いてみましょーか…。」

「だから、第3新東京市の郊外を歩いていたら急にまぶしい光に包  
まれて知らないところにいたんだ…それで目が覚めたら僕の体が女  
の子になってるし、どうしようかと綾波と二人で歩いてた黒い服の  
男たちの取引現場を偶然見て、薬を飲まされたらこんな体に…。  
とユイが説明すると茶髪の少女は少し考えるような姿勢と取り

「つまり…あなた達は異次元から飛ばされてきたのね…。」

と言った。すると横にいた老人が

「しかし、哀君そんなことが…。」

と言った。すると哀は

「いい、時空と言つのはいくつもの空間が複雑に入り混じつてできているの…それらはほとんど交わることはないけど、もし、何らかの理由で偶然交わった場合今回のような現象が起きると思うわ…ただ、これには科学的な根拠は全くないけど…どうしても信じられないなら、実際に今度芦ノ湖畔に行つてみる?」

と言つた。するとコイは

「そうだね…僕の名前は碇シンジって言つんだ。今は碇コイって名乗つてるけど…。」

と言つとレイが

「私は…綾波レイ…。」

と言つた。

「私は灰原哀よ。そしてこっちが阿笠博士。そういうえば綾波さんだっけ、あなたも偽名考えた方がいいんじゃない?」

と言つた。するとコイが

「でも、異次元から來たんだから考えなくともいいんじゃないの?」

と言つた。すると哀は

「そうね…あと、行くところがないなら家にいなさい…。」

と言つと阿笠博士と一緒に部屋を出て行つた。

## 第3話 見知らぬ天井（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

これからもよろしくお願いします。

## 第参話 徐々にわかる現実

神奈川県 芦ノ湖畔北部

そのにあるのは使徒からの攻撃に対抗するべく作られた要塞都市ではなくごく普通の街と山林が広がっているだけだった。リニアホールはなく、兵装ビルもNERVもジオフロントさえなかった。

「本当に異次元に来ちゃったんだ…。」

とコイがつぶやくと哀は

「ここにあなたが言っていた要塞都市があつたの？」

と音つとコイは静かにうなずいた。

「ところで、できればいいんじゃが家に帰つたら少し話を聞かせてくれんかの？？」

と阿笠博士が音つとコイとレイはうなずいた。

「それじゃあ帰るわよ…。」

と哀が音つと阿笠博士とコイ、レイは阿笠博士の車に乗り込んだ。

ちゅうじやのじゆ

「ど…ど…じ…」

と言しながらトウジが田を覚ますとケンスケとヒカリそしてリツコが視界に入った。するとボニー・テールの高校生ぐらこの少女が部屋に入ってきて

「田覚めたんかいな！ よかつたわー。」

と言つた。

「じ…じ…」

とトウジが音つとの少女は

「じ…じ…か？ じ…じ…は平次の家やあんたらこの家の前に倒れとつたんやで。やうやう忘れるところが…わいは遠山和葉つてゆうねんあんたは？」

と言つた。

「わいは鈴原トウジや…。」

「そつちの三人は知り合いか?」

「向こうから赤木博士に洞木ヒカリ、相田ケンスケや…。」

と言つた。すると和葉は

「ちょっと待つてな…。」

と言つと部屋を出て行つた。

和葉が出て行つた直後ヒカリとケンスケ、リツコが目覚めた。トウジがここには平次という人物の家でその家の前で倒れていいたらしく話すと三人は首をかしげた。

「その話が本当だとすると…離れた場所にいるはずの私たち四人が同じ場所に倒れていたのよね…。」

「確かにそうなるよね。」

とケンスケが言うと和葉と色黒の少年が入ってきた。色黒の少年は「わいは関西では名の知れた高校生探偵の服部平次や…さつそくでなんやけど、なんであんなところに倒れつとつたか教えてくれへんか?」

と言つた。

「それが…突然白い光に包まれて気が付いたらここにいたんだ…。」

とケンスケが答えると平次は

「白い光?なんや変わつたもんやな…それまではどこのにいたんや?」と聞いた。するとリツコが

「私は第三新東京市の…」

と言いかけると平次が

「何言つとるのや…そんな町見たことも聞いたこともないわ…。」

と言つた。するとリツコが

「少し地図を見せてくれる?」

と言つた。

「ええで…。」

と言つと平次はどこからか日本地図を持ち出してきた。

リツコは地図を見ると

「やつぱつ…」

とつぶやいた。

「なんやつやつぱつって…。」

「第三新東京市は次に首都になるといわれていた都市よ…それを知らないつてことは異次元に来たかもしれないいつてこと…今、この地図を見てはつきりしたわ…。」

と言いながら地図を見せた。地図を見るとヒカリやケンスケ、トウジドやえわかるような違いがあった。

「異次元から来たとかなによつとるんやつ。」

と和葉が言つとワシ「は

「ええ…そのままの意味よ…時空といつのはいくつもの平行世界で構成されているの…その時空間の一つが何らかの原因で別の時空間と接触した場合どちらかの人間がもう一方に飛ばされる可能性があるの…。」

と言つた。

「そんなことあるんかいな?」

「科学的根拠はないけどね…。」

パラレルワールド

## 第参話 徐々にわかる現実（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

これからもよろしくお願いします。

## 第四話 ハナン登場

米花町 阿笠博士の家

「いい加減起きたらう？」

と誰かの声がする。

「わかったよ……。」

と言いユイが起きると哀がベッドの横にいた。横にベッドに誰もいないことからレイはすでに起きたようだ。

「おはよう。」

と言いながらユイが居間へ行くと

「お前が碇ユイか？」

と居間にいたメガネの少年に話しかけられた。

「はい……そうですね……あなたは？」

とユイが聞くとその少年は

「俺は江戸川コナン……探偵や……。」

と答えた。

「江戸川……ハナン？」

とユイが言つと哀が

「そう……江戸川コナン……本名は工藤新一……あなた達と同じくハナンの薬で体を小さくされた高校生探偵よちなみに。」

と言つた。

「初めてまして……碇ユイです……。」

とユイが自己紹介するとハナンの携帯が鳴った。コナンが

「もしもし……服部か……どうしたんだよ……」

と話を始めるとユイは

「あの……服部って誰ですか？」

と哀に聞くと哀は

「工藤君と同じ高校生探偵で東の工藤、西の服部と並び称されてい  
るわ……。」

と言つた。コイが  
「そうなんだ…。」

とつぶやくとコナンが

「コイ… 第三新東京市つて町知つてるか?」

と聞いた。コイが

「はい… 知つてますけど…。」

と答えた。

「大体どのへんだ?」

「芦ノ湖畔です…。」

とコイが答えるとコナンは再び電話を始めた。

電話が終わるとコナンは

「服部の奴今から来るから迎えに来いつてセ…。」

と言つた。コイが

「ところで… 聞きたいんですけど…。」

と手を挙げた。

「なんだ? それと敬語は使わなくていいから…。」

「さつきの電話で第三新東京市の事を聞いたの?」

とコイが質問するとコナンが

「ああ… それなら服部のところに異次元から来たとかいうやつらがいるんだかなんか知らんか? って言うもんだからお前らが異次元から來たつて灰原に聞いてたもんで確認のつもりで聞いたんだ…。」

と答えた。

「なるほど…。」

とレイが言つとコナンは

「お前の声… 灰原にそっくりだな…。」

と少し驚いたように言つた。

「あら… そうちしら? まあいいわ…。」

と哀が言つとコイが

「そういえば気になつていたんだけど…。」

。

と言つと哀は

「何かしら?」

と言つた。

「あなたは…いつたい何者なんですか?…とても小学生とは思えない  
んですけど…。」

とユイガ聞くと哀は

「あなた達と似たようなものよ…本名は宮野志保…工藤君や私、あ  
なた達が飲んだAPT-X4869の開発責任者の一人よ…。」  
と言つた。

「開発責任者つて…。」

「あとあなた達にあの薬を投下した連中についても説明しておくれ  
…工藤君は黒の組織つて呼んでいるけど…奴らは目的のためなら人  
殺しだつてする手段を択ばない奴らよ…おそらくあなたから聞いた  
特徴からあなた達に薬を投下したのはジンとウオッカ…。  
と哀が言つとレイが

「開発責任者つてことは、あなたもその組織の一員なの?」  
と聞くと哀は

「元ね…「コードネームはシヒリー…私はあの組織を裏切ったのよ…  
だから奴らに狙われているわ…。」  
と答えた。

「狙われてるって…。」

「大丈夫よ…奴らはこの薬の副作用に気づいてないわ…。」

と哀が言つとレイが

「つまり…私たちがその薬で小さくなつたつて気づかれなければい  
いのね…。」  
と言つた。

「そうよ…。」

と哀が答えると「ナンが

「そろそろ服部のむかえに行こつぜ…。」

と言つて四人は家を出た。

## 第四話 ハナン登場（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

やつとハナンが登場しました..。

これからもよろしくお願いします。

## 第五話 大阪から来た探偵

東京都 米花駅

「ナンと哀、コイ、レイ、阿笠博士が駅にいると  
「よう！ぐど…やなかつたコナン君たち！わざわざ悪いな！」  
と言いながら平次と和葉、金髪の女性、ジャージを着た少年、メガ  
ネをかけた少年、そしてそばかすがある少女がやつてきた。  
(えつ！リツコさんに、トウジにケンスケに委員長！？なんで？)  
と思ひながらユイがまじまじと見ているとリツコが  
「そこの後ろの二人…どこかで会つた？」

と聞いた。

「さ…さあ知らない…わ…。」

(このしゃべり方つてなんかまだ慣れないな…。)

と思いながら答えるとリツコは

「そう…ならいいんけど…。」

と言つたが完全に二人に疑いの目を向けている。

「とにかく行こうかないか…和葉は毛利のところのねーちゃんと一緒に東京案内したれや！」

と言つと和葉は

「わかつたわ…ほな行こう…。」

と言いながら行こうとしたがヒカリが

「ちよつと待つて…私たちが異次元から來たつていう証明をした人と話がしたいんだけど…。」

と言つた。すると和葉が

「そんなことより…とりあえず東京觀光楽しんで来ればええやん…」  
と言つてヒカリの手を引っ張り出した。

「そりやで委員長…しつかり楽しまな…」

とトウジが言つと

「ほな行くか…」

と和葉が言い六人は毛利探偵事務所に向かつた。

六人が行くと平次が

「それで…工藤…その二人か…小つこくなつたんは?..」

と聞いた。コナンが

「ああ…とりあえず阿笠博士のところへ行こう。」

と言つた。

「せやな…。」

と平次が答えると六人は阿笠博士の家に向かつた。

東京都 米花町 阿笠博士の家

六人が阿笠博士の家に入ると平次が  
「ところでもう一度確認するねんけど…小つこくなつてしもうた中  
学生つてのがその二人なんやな?..」

と聞いた。哀が

「ええ…そうよ…。」

と答えると平次は

「そつか…。」

と言つた。それから少し間を開けて

「それ以外にも異次元から来たり女の子になつてしまつたり大変や  
なー。」

と言つた。

「そういうや…服部お前が連れてきた四人組何者だ?..」

とコナンが言うとコイが

「リツ「さんとトウジとケンスケと委員長…。」

とつぶやいた。

「知り合いかいな?..」

と平次が言つとコイは

「うん…。」

と短く答えた。すると平次は

「何者なんや…あの四人は?..」

と聞くとコイは

「トウジとケンスケ、委員長は同級生…。」

と答えた。

「なるほどな…それで…」

と平次が言うとレイが

「私たちがどうするか…でしょう。」

と言った。すると平次が

「お前…そこの少しこい姉ちやんと喧にどるな…それはともかくやうこつことや…。」

と言った。するとコイが

「それについては…話しても信じてもらえないだろうし、元の世界に戻る保証はないからじばりへりでむ世話にならつと懇つただけど…。」

と言いながら哀と阿笠博士の方を見た。

「私はかまわないわよ…。」

と哀が言つと阿笠博士は

「まあ哀君がそういうのなら…。」

と言つた。すると平次が

「そりそろ和葉たちと合流しよう…。へれくれもあんたらの正体バレんようにな…。」

と言しながらコイヒレイの方を見た。

「もちろんだよ…。」

「ええ…。」

と一人が答えると六人は阿笠博士の家を出た。

## 第五話 大阪から来た探偵（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

これからもよろしくお願いします。

## 第六話 じちら毛利探偵事務所

東京都 米花町 毛利探偵事務所

「お邪魔するで！」

と言いながら平次が入ると

「あつ！服部君にコナン君！それに哀ちゃんまで…。」

と言いながら蘭が出てきた。

「和葉たちはどこや？」

と平次が聞くと蘭は

「和葉ちゃんたちならわしきまでここにいたんだけど…。」

と言った。

「どうか行つてしもうたか？」

と平次が聞くと蘭は

「そうなのよ… ところで哀ちゃんの後ろにいる女の子たち… 誰？」

と言つた。

「碇コイツて言つます。よろしくお願ひします。」

とコイが言つとレイは

「…綾波レイです… よろしく…。」

と言つた。すると蘭は

「ユイちゃんにレイちゃんね！ 一人ともよろしく…。」

と言つた。

「ともかく和葉姉ちゃんたち探しに行つ…。」

とコナンが言つと平次は

「そ…やな… いくで！」

と言つて毛利探偵事務所を出た。

東京都 米花町 米花公園

コナンたちが米花公園へ来ると光彦と歩美、元太、和葉、リツコ、ヒカリがいた。

「「ナナン君に哀ちゃん！平次お兄さんまで…」

と歩美が言うと「ナナンは

「よお！おめーら…」

と答えた。すると歩美がコイとレイの方を見て

「ところで…そこの一人は？」

と聞いた。

「綾波レイさんと碇コイさんよ…。」

と哀が言うと歩美は

「レイちゃんにコイちゃんね！私吉田歩美！それでこっちが小嶋元太君であっちが円谷光彦君…」

と言った。

「」いづら帝丹小学校に転校してきたんだ。」

とコナンが言うと歩美が

「それじゃあ一人とも少年探偵団に入らない？」

と聞いた。

「探偵団？」

とコイが聞くと歩美は

「うん！いろんな謎を解明したりするの！」

と説明した。

「とりあえず学校行つたらしつかり説明するからさー一緒に遊ぼう！」

と歩美が言うと平次が

「すまんな…これから少しの子たちと用事があるんや…和葉！…い  
くで…」

と言った。

「そうやつた！はよいかな！」

と言つと和葉はリツ「やヒカリど」からか現れたトウジとケンスケを連れて平次たちについて行つた。

「やつと全員そろつた。」「

と蘭が麦茶を出しながら言うと平次は  
「すまんのう…姉ちゃん…。」

と言つた。

「いいのよ…気にしなくて…。」

と蘭が言つと平次が

「そうや…話つてのは…この四人の事なんやけどな…。」

と言いながらリツコたちの方を見た。

「リツコさん達がどうかしたの?」

と蘭が聞くと和葉は

「それがな…簡単に信じられへんかもしだれへんけど…この人たちなんというか…異次元世界からやつてきたらしいんや…。」

と言つた。すると蘭は

「まさか! そんなことあるわけ…。」

と言つたが平次が

「俺も最初は信じられへんかったんやけど…この姉ちゃんととの電話でこの人たちが言つてることが本当やと確信できたらんや…。」

と言いながら哀の方を向くと哀は

「ええ…確かに異次元とかそういう話は簡単には信じられないけど、時間や空間と言つたものはいくつも存在するわ…たとえば和葉さんが私たちが探偵事務所に来る前に出て行つた今の世界と、そうではない世界…些細なことかもしれないけどそれがなければ碇さんや綾波さんは吉田さん達にはこの日に出会わなかつた…それが積み重なつて平行世界や異次元といった物が生まれてくる…だから、そういうものが全くないともいえないわ…ただ…何人もそういう人がいれば信憑性が高くなるしその逆なら低くなる…。」

と説明した。

「つまり…身近で最近突然現れてそんなこと言つてるやつがおらんか聞きに来たんや…久しぶりにぐど…やなかつたコナン君の顔も見なかつたしな…。」

と言つた。

「私の身近にはいなきけど……。」

と蘭が答えると平次は

「そうか……。」

と短く答えた。

## 第六話　いちら毛利探偵事務所（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

これからもよろしくお願いします。

## 第七話 容疑者 葛城ミサト

「コナンと哀、コイ、レイは阿笠博士と共に箱根に向かっていた。  
「お前らの知り合い…見つかるといいな!」

とコナンが言うとコイは

「まあ…リツコさんやトウジに限りずほかにこっちの来た人がいて  
としても現状じゃ会えないけど…。」

と言った。するとレイは

「でも…ほかにだれかいないか確認することは大切だわ…。」

と言った。

「そうね…とりあえずその意味でも第三新東京とか言う町がある場  
所を探すのはいいんじゃないから…ほかにいればだけど…。」

と哀が言うと阿笠博士は

「じゃがその時に一緒におらんかつた人がこっちに来ておるなら他  
に人がおらんとは考えづらいじゃろうし、それが確認できれば何と  
ができるじゃろうしな…。」

と答えた。

箱根 某所

「さて…ここからは徒步で登るぞ!」

と阿笠博士が言うとコナンは

「マジかよ!」

と言った。すると哀は

「またまにはいいんじゃない?行きましょう!」

と言つて登山道を歩き出した。

三十分後…

「みんな待つてよ!」

「待つてくれ!」

とコイと阿笠博士が休憩をしたいと申し出る。

「まつたく…博士が歩くつて言つたんでしょ…私達は先行くから後からついてきなさい…。」

と哀が言うとコナンと哀そしてコイに氣を使ったのか少し遅れてからレイが歩き出した。

### 展望台

「やつと着いたぜ！」

とコナンが言うとレイは

「…碇君が気になるからいつたん様子見てくる…。」

と言つて元来た道を戻ろうとしたが哀が

「大丈夫よ…阿笠博士はちゃんとした大人なんだから…」いつち来てみなさい…いい眺めよ…。」

と言つとレイは少し経つてから哀の方へ歩いて行つた。

すると大きな音を立ててコナンと哀、レイの三人の前に人が落ちてきた。

「なにか音がしたが何かあつたのか！」

と言いながら阿笠博士が展望台に来るとコナンは

「博士！警察呼んで！」

と言つた。

「わかつた！」

と言いながら阿笠博士は携帯を取り出しだが

「ここは圏外みたいじゃから中腹にあつた観光案内所まで行つてくる…」

と言い残し山を下りて行つた。

しばらくたつと神奈川県警の横溝警部ではなく同じく神奈川県警の西山刑事にしあざまが到着した。

「それで…あなた達がここに落ちてきた広町さんひろまちの遺体を発見した

わけですか…。」

と西山刑事が聞くとコナンは

「やつだよー。」

と答えた。

「それでその時ここにいて遺体を発見した阿笠さんには犯行は無理…小学生はもぢりんと論外…といつことば…時間的に遺体が落卜したと考えられる上の展望台からここへ来るには必ずこの場所を通らなければならぬ…つまり犯行が可能だったのは事件発生から約一十分後に上の展望台に行く道から降りてきた葛城ミサトさんとこいつになると…。」

と西山刑事が言つたのは

「ちよつち待ちなごよー私はそんなことしませんよー。」

と言つた。

「とにかく…まずは、上に行つて現場検証しましょー…もぢりん容疑者である葛城さんも遺体を発見した阿笠さん達もー。」  
と言つと西山刑事は山を登り始めて階はそれに続いた。

第七話 容疑者 葛城リサ（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

これからもよろしくお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9966v/>

---

名探偵とチルドレン

2011年10月10日14時07分発行